

開府 名古屋の都市づくり

— 家康の考えたこと —



池田 誠一

【5】那古野古城…名古屋城の立地点

1 台地の西北角

名古屋城が造られた台地は、「象の鼻」と形容される名古屋台地になります。南端の熱田から北に、金山、大須、栄と半島のように延びて名古屋の南北の骨格をつくっています(図1)。この台地は大曽根凹地と呼ばれる侵食谷をはさんで東側にも続いています。注目すべきはやはり西側の「鼻」の部分でしょう。しかし、その西北の角が注目を集めるよう



図1 名古屋台地を構成する熱田層

になるのは16世紀。戦国時代になってからです。濃尾平野に突き出たような形のこの一角は、尾張の国を見張るには絶好の場所でした。そして、ここに戦略的に目を付けたのは、尾張と対立していた駿河の今川氏のように。

今回は、名古屋城の立地する名古屋台地の西北角の地の築城前の姿をみてみたいと思います。

2 柳の丸から那古野城

(1) 今川那古野氏

名古屋城の付近は、古くは那古野荘という荘園でした。那古野荘は、平安時代の末期、東大寺別当にもなった小野顕恵が開発したとされます。その後足助氏を経て、鎌倉末には今川氏の娘が名児耶(なごや)氏に嫁いでおり、ここに今川氏と那古野の関係ができました。そして室町時代には今川那古野氏領になったようです。範囲は定かではありませんが、併記の地名に、広井、押切、田幡などがあることから、名古屋城の辺りと考えられています。今川那古野氏は足利一門で将軍直属。尾張の守護とは別系統でした。このため応仁の乱には尾張の斯波氏、駿河の今川氏との間で翻弄されることになります。

そのような状況の中で、1520年頃、今川氏親(義元の父)が斯波義達を破りました。その結果、氏親は尾張の半分を得て、清須の監視

のために末男の氏豊を(継嗣として)送り込みました。名古屋台地の西北角に城が築かれることになったのです。そこは柳の多い土地だったため「柳の丸」と呼ばれました。

1530年代になって、その城を謀略で奪ったのが尾張守護代の奉行の一人、勝幡にいた織田信秀です。若い今川氏豊に連歌の仲間として接近し、家来を呼び寄せると共に町に放火し、混乱に乗じて城を乗っ取りました。その後、城は改修されて那古野城となり、1534年信長はこの城で生まれたというのが定説です。父信秀はすぐ古渡城に移ったため、彼は幼くして城主とされ、1555年に清須城を奪うまでの20年間を過しました。その後も城は家臣に守られてはいましたが、信長の死とともに廃城になり、放置されることになったのです。

(2)築城の前の町

それではその那古野城の城下はどのようなものだったのでしょうか。史料が少なく、イメージできるものは名古屋城が出来てから振り返った絵図です。2つの系統あって、一つは慶長以前の那古野村図とされるもの、いま一つは築城時の名古屋古図とされるものです(図2A・2B)。

両図から分かることは、

- その本丸が今の二の丸付近にあったこと、
 - 那古野氏一族の屋敷が残っていたこと、
 - 相当数の寺や社があったこと、
 - 西～東、西北～東南の道があったこと、
- などです。この中の東西の道は、江戸時代は中

小路と呼ばれた道、今の三の丸の官庁街の真ん中の道とされます。また西北から東南にS字に曲る道が、清須から七本松に抜ける戦国時代の鎌倉街道ではないでしょうか。さらにB図からは、道に沿って家並みがあったことが分かります。別の史料では今、中、下の市場もあったとされ、今の桜通付近にかけて、相当の規模の町ができていたと見る事ができるようです。

(3)掘り出された那古野城跡

那古野城は、最近まで、本丸が名古屋城の二の丸に在ったという位で、詳しいことは分かっていませんでした。しかし昭和の末ごろ



図3 大きな溝の出土状況とその現在の位置付近(下は文献②より)

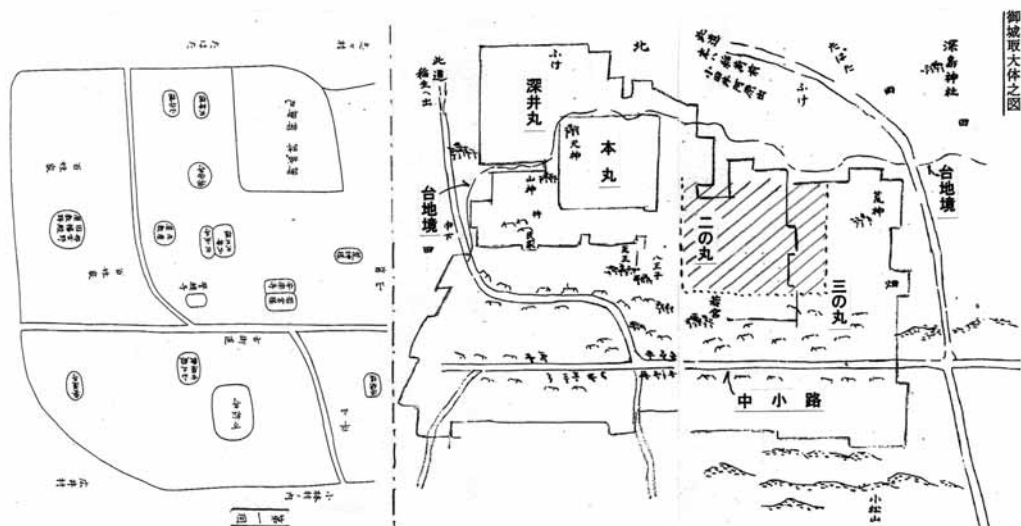


図2 名古屋城築城以前の那古野城の付近。A(左)は慶長以前とされるもの、B(右)は築城時とされるもの。(文献①に加筆)



図4 三の丸での大きな溝の出土地点と城跡と想定される範囲(文献③等)

から、遺跡としての発掘によって意外な事実が分かりつつあります。

なかでも注目すべきことは城の規模でしょう。三の丸地区のいくつかの調査では、城等の防御用の堀としか考えられない大きな溝が発見されたのです(図3)。それも、1箇所は官庁街の中央の通(中小路)の南側にあり、絵図では東西に通っていた道の南側まで城郭が延びていたかもしれません。また屋敷群は三の丸の南端、外堀通に隣接する県図書館の所まであったと考えられています(図4)。

このことと前節とを併せて考えると、那古野城は、最盛期には、城郭が三の丸まで延び、武家屋敷は外堀通付近まで続いており、その城下の町並は万松寺(今の桜天神)のあった桜通を越えて広がっていたという可能性があるのです。那古野城はこれまでのイメージを相当超える規模のものだったようです。従って名古屋城は、そのような大きな城の跡に築城されたということになるのです。

3 紀行 那古野城跡を巡る

… 築城前の姿を追って …

名古屋城以前にあった那古野城の跡を追って、名古屋台地とその周辺を歩いてみます。

〈古城の跡〉

地下鉄市役所駅の県庁側の改札を出ます。5番出口を出た前の道路が、江戸時代には中小路と呼ばれ、築城前に東西の道、「古街道」があったとされる通りです。

西に進むと、両側は国や県の関係の建物が並ぶ官庁街です。1本目の右向こうにある国の合同庁舎、2本目の左向こうの県の三の丸庁舎の建設時には、堀のような大きな溝が見つかりました。とくに後者は道の南側にあり、城郭がそこまで延びていた可能性があるのです。その先の護国神社の向こうの裁判所の建物の時も大きな溝ができました。

今市場の位置とされる

県警西南の信号を左に曲って本町橋を渡り、右に堀に沿って歩きます。新御園橋を渡ると右側は県の図書館です。ここにも屋敷跡らしい遺跡が出ました。図書館を越えると道路は堀川に向けて下っています。川の手前に小さな公園があります。昔の瀬戸電の終点、堀川駅の跡です。目の前には名古屋城の三の丸の土手が高く積み上がっています。

〈台地の姿〉

ここから北に続く土手は、ほぼ名古屋台地



江戸時代に中小路と呼ばれた官庁街の中央・東西の通り



名古屋城三の丸西南角の土手。
手前は名鉄瀬戸線の終点、堀川駅の跡

の高さになります。北に行った幅下橋の手前で右に曲って振り返るとその高低差がよく分かります。この付近に築城前の古図にある西北に向かう道があったのでしょうか。

大きな交差点を歩道橋でぐるりと廻り、右手に天守閣を見て西に堀川沿いに下ります。堀の手前の道を右に曲ると左は朝日橋です。築城当時の堀川はここが始点でした。すぐ、城の正門前からの道と合流します。越えると右は水堀です。少し行くと堀の水を落とした辰ノ口の水路跡を渡ります。この辺りからは天守が望めますが、その左側のブロックが城の西北端の深井丸です。台地から外れた湿地帯を埋め立てて城の郭を築いた所で、元々の台地は本丸の所が境だったようです(図2B参照)。江戸時代の分析では、元の名古屋台地の角で一番高い所は二の丸の付近。本丸の所は少し低かったようです。新しい城は那古野城に比べて台地の西北端にせり出した形で造られていたことが分かります。城壁の北の角にある櫓は清須城の天守を移したとされますが、材料を使っただけともいわれます。

右に曲り、堀端を東に進みます。城の石垣が、深井丸、本丸、二の丸と続きます。その東側を取り囲む三の丸との境目には、今は広い大津通が通ります。右に曲り、二の丸の空



幅下付近でみた名古屋台地の高低差



幅下付近を割って走る国道。この付近に那古野城下を
通って清須に向う道が通っていた？



名古屋城深井丸の西北角にある櫓。
湿地帯にせり出していた



名古屋城北側につづく石垣。右が本丸。左が二の丸
堀に沿って名古屋台地を上ると地下鉄市役所
駅の北側に出ます。

4 西と北の低湿地

名古屋城の立地点のポイントは、家康が馬が動きが取れぬと指摘したという、西から北を取り巻く低湿地帯にありました。しかしこの低湿地はまもなく乾燥していったらしいのです。

初代藩主義直は、この乾燥化をみて、この城の防備は大丈夫か？と家来に質問しています。湿地が無くなって家が建っていたからでしょう。大坂城が落城する時、そのきっかけになったのは、淀川を越えて天守に飛んできた大砲の玉でした。今、名古屋城の堀から天守までの距離は200^{メートル}しかありません。大砲戦の時代には、とても堅固な城とは思えません。結果から見れば、この城は対豊臣戦のためだけの城だったといえるかもしれないのです。さて、今回は、いよいよその新しい城の築城になります。

〈主な参考文献〉

- ①奥村得義『金城温古禄』(名古屋叢書 続 15所収)
- ②同編集委員会『新修名古屋市史2』(1998、名古屋市)
- ③松田訓『遺構からみた那古野城の残影』
(2002、県埋蔵文化財センター研究紀要3)